

総合的な学習の時間の学習指導案及び成果と課題

呉市立明立小学校

上田 倫子

1 「呉版単元構想図」, 「学習指導案」

※別紙参照

2 「本質的な問い」を生かした単元構想の工夫

- ・ カリキュラムを構成するにあたり, 「本質的な問い」を設定し, 逆向き設計で単元を構想した。
- ・ 本単元では, 「単元を貫く問い」を「食を守り, 生きるため, 自分たちに何ができるのだろうか。」とし, 食をめぐる問題と自分たちの暮らしとの関わりについて探究し発信していくこととした。その発信の機会として, 学習発表会を一つの目標に定め, 取組を進めてきた。
- ・ 学習発表会の内容を考える際には,
 - ① 学習活動の流れに沿って4つのテーマを決め, 大まかな道筋を立てた。
 - ② それぞれのグループが自分たちでセリフや動きを考え, 資料集めをした。(ボーン図の活用)※ボーン図は, テーマごとに発表の構成を決める際, また, 台詞を決める際に役立った。

3 研究授業の関わる成果と課題

【成果】

- 「振り返り」につながるように「課題設定」は工夫されていた。
 - ・ 体験, 経験したことで得た学びを表現していくという, 全員がめざすものが一つになるよう仕組まれていた。共通体験を生かせる発表をするので, 児童一人一人が生き生きとしていた。
 - ・ ゴールが明確なので課題が児童のものとなっており, 振り返りが一人一人のものになっている。
 - ・ 個々で設定したのではっきり分からないが, まとめの言葉がしっかり言えていた様子から, 課題をもって臨んだ児童が多いことが分かった。
 - ・ 課題, 相手意識が明確で, 児童のものになっていた。課題を児童と共有することができているので, それが振り返りにつながっている。
 - ・ 児童がアドバイスを受け入れ, それぞれの具体的な改善策を見据えていた。
 - ・ 教師も児童も常に「単元を貫く問い」を意識して学習を進めている。
 - ・ ゴールに向かった振り返りになっているので, 課題設定の工夫ができていたことが分かる。
 - ・ 真摯に学習に取り組み, 自分の言葉で振り返りが書けていた。
- 「まとめ・創造・表現」できるように「整理・分析」の学びが工夫されていた。
 - ・ 課題が「食品ロス」で明確に示されており, 教師が常にテーマを意識させていたことで, 視点もはっきりしていた。その視点についても, 児童が考えたもので, 全員が共有できていて, 素晴らしかった。
 - ・ 視点を明確にし, それに沿って話し合うことができていた。

- ・ 教師が児童の発言に沿って、「何のため」「何が」という言葉でタイミングよく切り返しをしていたことで、よりよい発表にするための本時であることを、児童は意識することができた。
 - ・ 場の設定、環境づくりが工夫されていた。集中できるように、役割分担や記録用紙や掲示に工夫が見られたので、児童は意見を共有しやすく、よりよい「整理・分析」の時間になった。
 - ・ 思考ツールの掲示や話し合いプリントの拡大掲示が、児童の思考を整理して深めていた。
- 生徒指導の三機能を生かした授業であった。
- ・ 要所、要所で、教師の的確なアドバイスや声かけをする姿が見られ、児童が安心して話し合いに参加できていた。
 - ・ 配慮の必要な児童に対して、グループ内の他児童がそっと声をかける姿が見られた。普段からの人間関係の構築、教師の関わりが生かされている場面だった。
 - ・ 発表者を見て聞く姿勢の徹底、自分の考えをもつ時間を確保されていた。
 - ・ いいところをしっかりと認め、もっとよくなるように声かけをされていた。
 - ・ 児童の記述を見取り、全体で共有していた。
 - ・ 児童が自己決定したりお互いを認め合ったりする場面が、話し合いの中にたくさん見られた。
- ICT の効果的な活用ができていた。
- ・ ロイロノートが情報整理に活用されていた。
 - ・ ICT だけでなく、拡大資料やふせんなど、目的に合わせて活用されていた。
 - ・ みんなのアドバイスを共有できるので、効果的に活用できているといえる。
 - ・ これまでの積み上げが生かされていた。
- 「主体的に学び、論理的に思考できる力」を高めるための単元になっていた。
- ・ ゴールがはっきりとしていて、本質的な問いになっていた。
 - ・ 本質的な問いを常に念頭に、児童が考えたい、知りたい、調べたい、というような課題になっている。意欲的な児童の姿からも主体的な学びになっていることが伝わった。
 - ・ 自分の考えについて、理由を付けながら話し合いが進んでいた。
 - ・ 体験活動に支えられているからこそ、「一粒のお米の大切さを伝えたい。」と本気で思っていると思う。
 - ・ 一人一人が自分のめあてをしっかりともち、活動していた。
 - ・ 生き生きと考え、ゴールに向かって真剣に取り組む児童の姿を見ることができた。
 - ・ 相手意識があり、他教科との関連や、自分たちの生活を見直したり生かしたりする活動が構成されている。

【課題】

- ・ 児童同士で発表内容や発表方法の相互評価を行ったが、難しかった。「よいところ」は書くことができている、「改善点」の伝え方が難しい様子であった。
 - 普段から、否定的ではなく、目的に沿った建設的な意見を交流する取組を行う必要がある。
- ・ グループの人数が多いので、発言に偏りが出た。
 - グループ内で、小グループを作り、話し合いを行うといった工夫が必要だ。

4 単元で育成を目指す資質・能力に係る成果と課題

(1) 児童の変容と分析

質問内容	単元前 肯定的評価	単元後 肯定的評価
・身近な問題に対して、自分ができることを考えようとする ことができる。	95%	100%
・教科・領域等で学習した内容や方法を現実の課題に対して活用 しようすることができる。	95%	100%
・自分の考えを積極的に伝えたり、自分の考えとその理由を明ら かにして、相手に分かりやすく伝わるように発表を工夫したりす ることができる。	76%	92.5%
・総合的な学習を通して、自らの生き方について考えたり、見直し たりする。	84%	100%
・食に関する現状や問題に対して関心がある。	100%	100%

○分析

- ・ 児童は、もともと、身近な食について関心が高く、教科領域等で学習したことを活用しようとする意欲は高かったが、論理的に思考し、表現することにおいて課題意識があった。しかし、本単元において、目的を明確にし、相手意識をもって伝えるという学習を行ったことで、児童自身が論理的思考力・表現力が高まったと感じている。
- ・ 探究課題の「食をめぐる問題と自分たちの暮らし」を通して、自己の生き方を考え、社会の一員として何をすべきかを考える意欲が高まったと言える。

○発言、ノート、ワークシート等の記述、行動等

《実行後の児童の振り返り》

- ・ 一日平均3kgだったご飯の残食が、残食0の日がありました。また、残食があっても、800g程度に減ってうれしかった。わたしたちの発表が伝わったのだと思います。【論理的思考力・判断力・表現力①】
- ・ お米の大切さを学校のみならずにも伝えたから、今度は家でもがんばりたいです。それがいつか世界につながっていったらいいです。【知識・技能③】【主体性・積極性②】
- ・ わたしたちの発表は、日本を救う一歩だだと思います。それは、食品ロスをなくそうと努力したからです。食品ロスをなくそうというこのプロジェクトは最高だと思います。【論理的思考力・判断力・表現力①】
- ・ 明立小学校の児童と先生、保護者へのアンケートで、「一粒の命」の大切さが伝わったとアンケートに答えてくれた人は96%だったので、よく伝わったのだと確信した。【知識・技能②】【主体性・積極性②】

- ・ わたしたちの発表は無駄じゃなかった。意味のあるものだった。【主体性・積極性①】
- ・ これからも取組を続けていきたい。食品ロスが0になればいいなと思います。【主体性・積極性①③】
- ・ ぼくは、発表前は、本当に成功するのか心配だったけれど、残食の減少やアンケートから、大成功したんだと分かってうれしかった。【主体性・積極性①】
- ・ これまでみんな、米をはじめ、食品を大切にできていなかったけれど、本気を出せばこんなに残食を減らせるのだと、改めて自分たちで考えた発表をしてよかったと思いました。【知識・技能③】【論理的思考力・判断力・表現力④】【主体性・積極性③】

《行動》

- ・ 明立小学校では、残食が多いと知り、自分たちで計画し残食調査を行うようになった。残食がなかった学級には表彰状を作り、配付するなど、単元を通して自分たちでできることを行おうとする姿が見られるようになった。【知識・技能②】【主体性・積極性①②】
- ・ 保護者アンケートでは、家でも買い物や調理の方法を工夫して食品ロスに取り組んでいきたいと感想が多くあった。日本の食糧自給率を上げたいからと、朝食にご飯を食べる日を増やした家庭もあった。【主体性・積極性③】

(2) 単元を通じた成果と課題

【成果】

- ・ 自分事として学習を深め、自分たちの生活や社会をよりよくしようと主体的に学習を進めることができた。「食」に関する問題は、児童にとって最も身近であり、一人一人が持続可能な社会の担い手としての意識を高め、自らの生き方を見直すに相応しいものであった。
- ・ 第5学年では、社会科で日本の産業や食糧生産について、家庭科では、調理について学習し、国語科では、食品ロスについての教材が扱われていることから、学習内容を横断的に関連付けて学習を進めることに適した内容であった。また、算数科で学習した数の処理や理科で学習した植物の発芽等、探究活動に教科で獲得した知識・技能を活用する場面も多かったため、学ぶことの価値を自覚することができるようになった。
- ・ 本単元を通じた探究活動によって、学校全体や保護者の意識も変容した。「本質的な問い」を問い続けることは、個人や学級の問題解決を超え、多くの人の気持ちを動かすものになることが分かった。

【課題】

- ・ コロナ禍において、体験活動や実行場面での情報発信の方法に制限があった。その中でできることを行ったが、直に接する機会が限られる中でも、児童にとって学びが深まる活動の形を考えていく必要がある。
- ・ 「本質的な問い」は、単元で終わるものではなく、永続的に続くものである。今後も、持続可能な社会の実現へ向けて自分ができることを考え続け、矛盾や葛藤を乗り越えて生きていくことが重要であり、それを日々の教育活動の様々な場面の中で、問い続けなくてはならない。